
ホワイトランド

中浦雄介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホワイトランド

【Nコード】

N2617B

【作者名】

中浦雄介

【あらすじ】

ある男が病気にかった時の話。病気って怖い……ってテーマとは少し違う、超モラトリアムな作品です。

（前書き）

実話ではないですが、フィクションでもないです。なんか共感出来なさそうな皮肉っぽい主人公ですが、飽きずに見てくれたら嬉しいです。感想を頂けたらもっと嬉しいです。

あの白い箱の中に入ってた、カスタードクリームパイはまだ残ってる？

何故か俺はそれを好きでも嫌いでもないのに、今はとても愛しく感じる。

折角、両親が買ってきてくれたから食べたいんだけど。

シーツの染みも、温かい毛布も、握っては伸ばして一人つきり。空気が吸いにくくて、吐きにくい。換気はそんなに悪くない。

目眩とか動悸とかは麻痺するもんだってやっと分かった。身体がリズミカルに引き攣ってる。

点滴が奏でるミルククラウンの音は、聴こえなくて、聞こえないやってらんねえ、って感覚が強い。指先の皺が二重に見えるほど、視界がぼやけてるんだけど、どうしたらいい？

多分、もう少しって意味なんだろうか。

もう少しで……、もう少しで俺は死んでしまうのかな。

ベッドで寝て、天井の蛍光灯が、ジー……って鳴いている。『今まで』の人生を振り返るフィルムの音みたい。

俺は『今まで』を思い出してみる。

正直、そんなに良い人生じゃなかったな。

中1の時に、体育の授業でキーパーなんかしちゃって。ボールを捕まえてダイブしたら、ポストを計算してなかった。骨折。

中2の時に、好きな女の子から恋愛相談された。なんか、野球部のキャプテンが好きらしい。

中3の時に、受験ムード……は味わってないな。公立なんて簡単に受かったし。

修学旅行も、文化祭も、何一つとして、思い出がねえよ。参加したっけな？

体育祭は覚えてる。

なんか、馬鹿みたいに綱引きとかして、馬鹿みたいにリレーの二番手をやって。

それで、賢そうな眼鏡小僧みたいに、貧血でぶっ倒れたんだっけな。覚えてるよ。

あの時は、学校に大規模な地震が起きたかと思った。小学生の頃は、地震が来ると妙にはしゃいだりしたのに、そんな感じじゃなかった。

膝が無くなったと思って、そしたら膝が地面に落ちていて。バタツ、て音がしたと思ったらいつの間にか倒れていた。

何分後か、何時間後か。

もしかして、何日も、何週間も、経っていたのかも。

流石に何年、ってことは無かったけど。

「先生、ウチの息子の病名は何ですか！」

そんなことを両親は言ってたかもしれない。俺は寝かされて、微妙に聞こえなかったから。

母親は泣いていた。父親はどうか知らないけど、必死に何かを堪えてた。

ただの貧血じゃねえの？って疑問と、バクンバクンと心臓が高鳴って、気持ち悪かった。

だから、俺が白血病だって聞かされた時は、流石にテンション落ちた。

白血病？

何だよ、それ。

“腫瘍化した白血球が変形し、無数に増えて、ガンみたいになる”

は？うるせえよ、って感じ。

なんか治らないらしい。 医術の進歩ってそんなものかよ、って突っ込む以前の問題で、もう取り返しがつかない状態になってるんだって。

どうしていいのか、よく分からなかった。

だって、悲劇でもなんでもないよ、これは。

付き合ってる彼女なんていないから、悲しい別れもない。

実は、反抗期だったから、家族との折り合いもついてない。やりたいこと、夢、そんなものないから、挫折もしてない。とりあえず、流れ流れ生きてきたから、何のドラマもない。

淋しい、って思われるかもしれないけど、普通はそうじゃないのかな？

かっこよくもない男が、人生を語ろうなんて出来っこない。違うか？

世界の中心で愛を叫べない。

今、会いにゆけない。

瞳をとじても、誰も思い浮かべられない。

花びらのように散りゆく中では、奇跡が起きなかった。

だから、筋違いだと思う。俺じゃなくて、もっとそっぴいのが似合う奴の方が良いんじゃないか？

外を見ると、桜が綺麗だ。

窓にくつついたり、虹みたいにアーチを描いたり、凄くかっこいい。

ギア1、ギア2、ギア3。

誤作動以前に泣きそうで、ちょっと辛い。

蛍光灯が瞼の裏を照らして、睫毛がくつきりと見える。

眠ってしまえば、このまま、全て消えてしまいかもしれない。

俺は何も知らなかった。

白血病どころか、白血球、赤血球、ヘモグロビンなどの物質ですら。

少し、自分で調べてみたら、『フィラデルフィア』みたいな単語が出てきて、面倒になり、諦めてしまった。

医者がダメだっていうからダメなんだろう。

もうダメ、手遅れ。

それしか分からなくい。

あとは、勝手な想像と、勝手な感性和、勝手な述懐と、勝手な盲信。

阿保らしい意見だけど、単純に勘違いしていたことがある。

（白血病って血が白くなるんじゃないの？）って。

いや、俺以外でもそんなこと思ってるやつはいるんじゃないかな？俺は頭が悪いから、そう思ってたんだだけ。

試しに手首を切ってみた。

すると、立派に赤く染まっていった。

血が床に落ちていって、俺の周りに赤い斑点が出来て。

何だ、白くねえじゃん、って安堵感と、急にブラックアウトする
脳内の気絶信号。

頭が真っ白になった。 ブラックアウトじゃなくホワイトアウト？

白血病の白ってこういうこと？

長い気絶から覚めたら、母親が目茶苦茶に泣いていた。

父親は目が血走って、何を話していいか分からないって顔をして
いた。

俺に対して、謝ったり、叱ったり、随分と忙しそうだった。

ああ……俺は自殺しようとしたんだ。

そこで初めて気付いた。

俺は死にたかったのか？

いや、違う。そうじゃない。

今でも寝るのが怖い。寝ると、そのまま死んでしまいそうで。

早く死にたかったのか？

思い残すことなんてないし、ゆっくりと余生を過ごせばよかった
のに？

俺は今まで、何してきたんだろうな。

中1の時に、頑張って、ハットトリックでも決めればよかった。
ファンタジスタを気取って、ドリブルで抜け出したりして。

中2の時に、駄目元で告げてればよかった。もしかして、あの時
の恋愛相談は俺の気を惹くための作戦だったのかも。

中3の時に、御三家なんか目指せばよかった。ノーベル賞でもピューリッツァ賞でも、至上最年少で取ってみせたかった。修学旅行は海外へ。

文化祭では、詩吟でもやってみようか。

体育祭は……そんなもの、休めばよかったな。

禿げた頭にグサグサと突き刺さる、後悔の光線。
たまに目眩がして、世界がまた白くなる。

俺は何のために生きていたんだろうか。

俺の後ろにある道程は、何にも残ってなかったのか。

俺は死んでしまう。

あのブラックアウトで、身体が白く染まって行って、土に還ってさよならバイバイ。

何だかな。

後悔だらけ。

多分、狂ってたんだよ。あの体育祭の日まで。

何もしてこないで、いつか腐るのを待っていたんだろうな。

脳内から産まれた、“何かしたい”って衝動を無視してたんだろうな。

俺が本当に生きていたのは、三分前ぐらいからだっただろう。

ああ、俺は少しでも生きていたんだな。

“産まれてこれただけでも、人生に感謝しなさい”って、学校の先生が言ってた。

うん、よかった。

このまま『俺』が白く染まって行って、大地に還ったとしても、俺には生きていた時間がある。

後悔出来てよかった。

生きていてよかった。

これは俺の命だったんだ。

ああ、でも。

カスタードクリームパイは最後に食べたかったな。

まだあるかな？

あの白い箱に入っているやつ。

·
E
N
D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2617b/>

ホワイトランド

2010年11月20日14時58分発行